

芭蕉の思想・作風の展開と『莊子』

— 延 宝 ・ 天 和 時 代 —

廣 田 二 郎

「昨日の我に飽く。」と折々門人に語つたといふ芭蕉は（『旅寝論』）、まことに生涯にわたつて、その作風・思想を展開し続けて止むことを知らない詩人であつた。然して、その作風・思想の展開の根源的な動因は、もちろん芭蕉の創造的個性のうちに探求せられなければならないであらう。さらに、それが形成せられた歴史的社会的な条件もまたこの探求を支ふべきものとして解明せらるべきであらう。しかし、その凝滞することを知らぬ創造的個性が、所与の歴史的社会的条件に制約されながら、同時にそれに働きかけ、自己の作風と思想の在り方を探求し、決定し、しかもそこに固定せず、常に自己脱皮しメタモルフォーゼ（変貌）し続けた秘密を解くには、それと『莊子』とのかかはり方を明らかにすることも見のがされてはならないであらう。偉大なる「渾沌」であるところの芭蕉の創造的個性に分析的な解明の操作を施すことは、これに「七竅」を穿つて、解明し得たと思ふ瞬間にむなしい死骸たらしめてしまふ結果におちいることになるかもしれない。しかし、この秘密を押へることを忘れて、いかに彼を「造化随順の詩人」などと偶像化してみても、それは彼をわれわれの詩人としてその価値に値する受けいれ方をするとはならない。かの偉大なる「渾沌」を真に「渾沌」としてあらしめ、生成発展して止まない宇宙の何物かに冥合せしめた媒介者と

芭蕉の思想・作風の展開と『莊子』

のかかはりあひを、その生きてはたらく相において明らかにすることは、かれの思想・作風における発展展開を跡づけるだけでなく、かれの価値を明らかにし、文学史における位地を意味づけることにもなるであらう。

このやうなわけで、芭蕉の生涯にわたつての『莊子』とのかかはり方をとりあげてゆかなければならないのであるが、それは、紙幅の制限されたこの小論のよく果し得るところではない。それで、ここでは時期を限り、『莊子』と芭蕉との関係がよく問題としてとりあげられる延宝・天和時代のそれについて考察することとしたい。

寛文時代

延宝時代の芭蕉と『莊子』との関係を考察するにあつては、まづ、それに先立つて、寛文年代における彼と『莊子』との関係が一応言及されるべきであらう。

寛文年代の作品を見てみると『莊子』に関係があるとみられるやうなものは、発句においても連句においても見出すことができない。しかし、寛文十二年に著はされた『見おほひ』は、頹廢し、墮落し、行きづまつた貞門末流の俳諧の俗物性に対する抵抗精神のあらはれとして、まことに若々しい、光彩まばゆき編著であつた。にせものあるひは見せかけだけのものに対する「ほんもの」のいかなるものであるかをひとびとの眼前にたたきつけてみせた作品であつた。処女作はその作者の生涯の作品を示すものだといふが、まことに『見おほひ』は宗房の「ほんもの」であることを証し立ててみせたものであつた。中世的、貞門的な暗さに制約されながらも、それを裂き破り、その裂け目からはげしい、また光彩そのものである生のかぎやきを放射してゐる。柔軟な、決して化石化、固定化しない真個の創造的個性の生命にぢかに触れさせるものをそれは明らかに持つてゐる。「見おほひ」における遊蕩的なもの「など」とふ見方のために、この創造的個性における生命的なるものを見紛らはしてしまふといふのは、宗房が実にこの作品

において打破し、超克しようとした俗物性そのものにとらはれた考へ方にはかならない。固定化し、常識化し、日常性のうちに埋没してゆくものに対し、柔軟にして、絶えず流動し、拘束から脱出し、展開し、新しく形成してゆく生命的なるものを表現し得てゐるこの作品は、この意味ですでに荘子のな性格を内在せしめてゐる。ただ、まだ視野も狭少で思索も十分に深化されてゐない若さから、もつばらエスプリ・ザニモオ（動物精氣）で押しまくり、そのひたむきな燃焼によつてのみ生命の在り方の証しを立てうよとしたために、すべてを見尽し、見とほしてゐる『莊子』の自由さからみれば、それは甚しくかけはなれ、何らのかかほりも持ち合はさないかのやうに見かけられるのであるが、反俗性、生命性によつて、この両者の間には、すでに共通して持つものがあることを見るのである。青春を徒に古風俳諧の中に埋没させて来てしまつたかに見えた宗房が、『莊子』と出合ひ、これを受けいれるべき成長をとげてゐる事実を、ここにわれわれはつきつけられるのである。

談 林 時 代（延宝年代）

芭蕉の『莊子』に対する目は、はじめ談林時代に宗因によつて開かれたらしく思はれる。宗因は莊子の像に讚して抑々俳諧は雑体のそのひとつにして、連歌の寓言ならし。莊周が文章にならひ、守武が余風を仰がざらんや。

といった。彼は、寛文十年二月十五日、豊前小倉の広寿山福聚寺の法雲禪師の許で薙髪出家してゐるし、またその以前、寛文四年には小倉に至つて、折からそこに留錫中であつた即非禪師に謁してゐる。さうして、寛文十一年五月二十日、即非禪師が長崎で遷化した時には、宗因も長崎にあつて

かくれけりいかにせよとか五月やみ

と哀惜悲嘆してくれる情を述べてゐる。かくの如くであるから、宗因の禪に參することは浅からぬものがあつたらうと

・ 芭蕉の思想・作風の展開と『莊子』

いふことが首肯されるのであるが、彼の『莊子』に対する親近は、この禪を媒介としてなされたものと見られよう。中世における三教一致の習俗以上に、禪は『莊子』とはその本来の性格からして相かかるところが深く、禪林においては『莊子』はもつともよく読まれた外典であつた。それ故、宗因には『莊子』に対する相当に深い受容が期待されるのであるが、すくなくとも彼の所説や作品からは、そのやうに深いものを見る事ができない。まづ、右の莊子像の讚の語中から、彼は『莊子』を「寓言」として解しゐたことがうかがはれる。一寓言の意義に関しては『莊子』に
寓言十九、藉外論之。^(三)（寓言、十に九は、外を藉りて之を論ずるなり。）
とあり、宗因の門人岡西惟中は、

寓言とは我が心に思ふ事を物に比し、事に託して言出すの義也。

（『俳諧或問』）

と述べてゐる。惟中は宗因から寓言の説を聞くところがあつたであらうから（もちろん彼自身も「^(三)専儒ヲ以テ業トス」といはれてゐるのであるから自ら『莊子』を読んでゐたであらうが）右の惟中の述べるところは宗因の解釈によるものとみてさしつかへないであらう。『莊子』はあまねく知られてゐるやうに『史記』の列伝に

其著書十余万言、大抵大率寓言也。

とあり、宗因もこのやうな伝統的な見方に従つて『莊子』を寓言の書としたのであらう。しかし、何を、いかに寓意するかについて林註によつたらしい宗因の解釈はかならずしも深くなかつたやうに思はれる。さういふ風であつたので、彼は「俳諧は……連歌の寓言ならし」と考へた。かくして、俳諧は連歌の寓言なるが故に「莊周が文章にならひ、守武が余風を仰ぐのだ、といふのでは、寓言そのものにおいて道を示さうとする『莊子』の本質を見失ひ、寓言をはなれて、その上により高き道ないしは価値をみとめることになつてしまふ。だから宗因は、同じ見解を

抑々俳諧の道、虚を先として実を後とす。和歌の寓言、連歌の狂言也。

——「蚊柱や削らるゝなら一かんな」の独吟百韻の前書——

とも述べる。かうした宗因の見方から、惟中の次のごとき言説が引き出されてくる。

莊子が寓言これのみにかぎらず、全く俳諧の俳諧たるなり。しかあれば思ふまゝの大言をなし、かいてまはる程の偽を言ひつゞくるをこの道の骨子と思ふべし。
(『俳諧蒙求』)

ここに至つて「寓言」は直ちに道に参する方法ではなく「虚」なる言語の描き出す怪異珍奇な表現をたのしむにすぎない「夢幻の戯言」(蚊柱やの独吟百韻の前書)となり下つてしまふ。「寓言」が直ちに示す道—真宰—造化—造物者は虚妄の戯言によつて所在がくらまされ、絶対の世界が見失はれたあとには相對の世界が帰趨するところを知らざる混乱雑様の相を呈してあらはれてくるだけになつてしまふ。

但世に賢愚貧福あり。律氣不律氣、上戸下戸、武家の町風、法師の腕だて、赤烏帽子、角頭巾、伊達の薄着、六方の意氣、をのをの其器にしたがふ。其心にあらざればしらず。古風・当風・中昔、上手は上手、下手は下手、いづれを是と弁へず。すいた事をしてあそぶにしかじ。
——蚊柱やの百韻の前書——

このやうな相對的な価値観におちいつてしまふ外はなかつたのだ。是非の相對的な世界から超脱するところに『莊子』の哲学の根本があつたのだが、それを見失つてしまつて、あへて相對の混雑の中に身を投じ、以つて「非を好むに理あるをすれば也。」(蚊柱やの百韻前書)と宣言する。かうして宗因は「齊物論」の論理に拠りながら「齊物論」のテーマを見紛らはし、さうすることによつて、俳諧を寓意的表現による遊戯文学と定位したのであつた。俳諧はここに和歌・連歌の寓言として「連歌を本とし連歌を忘るべし。」(蚊柱やの百韻前書)とされ、「夢幻の戯言」として、連歌の桎梏から解放されたのであつた。まさしく俳諧はその發展をはばむ最大最強の桎梏から解放された、その代償として高い思想的立場を失ふことによつて。宗因の

莊子像讚 世の中よ蝶々とまれかくもあれ

の句も彼のかうした莊子觀、俳諧觀の表現に外ならぬ。中世的なるものの徹底的破壊に熱狂してゐた延宝時代人は、宗因のこの見方と方法論とにまさに彼らの欲してゐたものを見出したやようよるこびを感じた。相對觀の世界に墮したことも、自由なる競争の全体的調和的發展を信じてゐる樂天的な彼等にはむしろ積極的な意味を持つものとして受けとられた。かくして全国的規模において談林のシュツルム・ウント・ドラंकの時代が展開するのである。

芭蕉もこのシュツルム・ウント・ドラंकの波に乗つて、宗因への甚しい傾倒ぶりを示した。

此梅に牛も初音と鳴つべし

桃青

梅の風俳諧國にさかむなり

信章

をそれぞれ立句とする『江戸両吟集』の百韻二卷（延宝四年）には、寓言的俳諧觀、寓言的俳諧表現方法論が宗因への傾倒の深さをあらはして、あますところなく示されてゐる。『江戸三吟』（延宝五―六年）その他この頃の作品も、いづれもこの談林的な特質をよくあらはして、今や「桃青」と名のつて活躍する芭蕉は、かつての寛文の「宗房」時代の貞門作風からは完全に離脱したことを示してゐる。しかし、この期には、まだ彼自身が『莊子』を読み、直接にそれから得るところがあつたらうと思はれるやうなことを作品その他から読みとることはできない。中には次のやうな附合も見出されるが

夕陽に牛ひき帰る遠の雲

桃青

老子のすがた山の端がくれ

信章

寓言の昔の落葉かきすてゝ

桃青

（『江戸両吟集』梅の風百韻）

しかしここには、宗因的寓言觀以上のなものをも見出すことができない。つまり、延宝初年から六、七年にかけては、談林の運動の渦中にあつて芭蕉は宗因を通じ、宗因的莊子觀を持ち、「夢幻の戲言」たる寓言的俳諧に熱狂してゐるにすぎなかつたことを知るのである。しかし、最初から中世的桎梏からの解放・脱出を願ふのみに急な、破壊的な談林の新風運動は『莊子』における高い思想性を見失つた当然の応報として、僅か七、八年のうちに拾収のつかない混乱放恣の極におちいつていつた。「すいた事をしてあそぶにはしはかじ。」といつた宗因自身、その混乱に耐へきれなくなつて、脱出してきた筈の中世的な連歌の世界に戻らざるを得なくなつた。新しい指導原理の必要を認めても混乱の極におちいつた俳諧のうちにそれをうち立てる氣力も体力もすでに老いた宗因にはなくなつてゐたのである。この混乱し、放恣を極めた談林の末期症状そのものの中から、新しい指導原理をうち立てることが、次代を担はうとする新進の作者に課せられた責務であつたのである。

延 宝 末 年

談林の俳諧改新運動が末期になつてゆくに従つて漢語を多く使用し漢詩漢文調の色彩を強めていつたことは広く知られてゐるところである。これは俳諧の作者享受者層の間に教養が高まり、漢籍に対する読解力が高まつて来、それにつれてペダンティックな新奇さを競ひてらふ傾向を激成したためと考へられるが、また一面には、談林の盛行時代の作品が主として和歌連歌謡曲等のわが国古典のパロディたるに終始した——和歌連歌の寓言たることに徹した——ところが反動的に強く飽かれて来たといふことにもよるものであつたらう。ともあれ、談林の自由な口語調による古典のパロディ化に対して時代の動向は詰屈な漢詩漢文調への転換を要請し始めてゐたのである。外なる形式（表現）の変化に従つて内容（理念）もその發展を要請されるに至つてゐた。宗因の俳諧寓言觀は改訂されなければならなくなつて

きてゐた。彼が自己のうち立てた俳諧國から引退しなければならなくなつたのは、単にそれが放恣乱脈の極におちいつたからといふばかりではなく、彼には耐へることのできない俳諧芸術觀の変改を迫る圧力がその底に生じてきてゐたからでもある。

変改を迫られたのは「俳諧は和歌・連歌の寓言」であるといふ俳諧芸術觀、即ち、俳諧は独立の文芸ではなく、待つところあるものであると考へるその点にあつた。俳諧芸術觀の変改への要請は、はつきりと自覺的に考へられたのではなくあつた。しかし、社会的經濟的に独立的な地位を確立するに至つた町人階級が、自己の文芸たる俳諧をいつまでも古典文芸の從屬的地位に置いておいて満足を感じてゐるわけはなかつた。演劇やその他の芸能の世界においてもこの新しい時代の新しい階級の意識によつて、次第に新しい、かれらの芸術が独立しつつあつた。はじめはおそらく単なる新奇追求と術学のためのさかしらにすぎなかつた漢語使用と漢詩漢文調への深入りは、必然的に漢籍熱を高めそこから漢籍による詩精神の覚醒と世界觀の改革、およびその結果よりする自己の立場に立つ新文芸觀の確立をもたらすことになつた。ここに談林調を超越すべき条件が徐々に熟成していつたのである。

滔々たる漢語使用、漢詩文調化の潮流の中にあつて、依然としてただ単なる言語の遊戯におぼれふけてゐるもの（俳諧の俗化に徹してゆくもの）——わが国古典のもぢりを漢詩文のもぢりにすり換へたにすぎないもの——と、その中に俳諧の革新の方途を探究し得ることに気づいたものとの二群に談林調作者は別れていつた。（このほか、宗因のごとく連歌の世界へ戻るもの、西鶴のごとく浮世草子の世界へ入つてゆくものなど、俳諧を捨てるものもあつた。）俳諧の革新を志すものは、漢詩が強烈な現実、激動する人生を表現するに耐へるものであることを知つた。それがなまなましい社会の現象を広くうたひ上げてゐることを見た。このことは彼等のこれから創り出さうとする詩にとつてまさに必要不可欠な新要素であることに目を開かせた。そして、それは強く高い思想の裏付けを支へとしてゐるもの

であることを彼等は発見した。彼等自身の目による漢籍の読みなほは彼等の新文芸の建設に何が必要であるかを気づかせた。その証拠に彼等は自分自体で漢詩のみならず『莊子』『列子』その他の思想書を読み始めてゐるのである。詩精神を支へる高く深い思想の書として『莊子』を第一に彼等がとりあげたことは、彼等の学んだ漢籍が五山の系統を引く禅僧等によつて与へられたものであつたらうといふことを推定させる。たとへば『田舎の句合』の序に嵐雪はいふ。

桃翁、栩栩齋にゐまして為に俳諧無尽経をとく。東坡が風情、杜子がしやれ、山谷が気色より初て、其体幽になどらか也。

実際に『田舎の句合』『常盤屋之句合』の判詞をみると、このほか李白・白楽天・陶淵明等の詩人の作、『錦繡段』所収の詩などを随所に引用し、活用してゐるのを見出すのである。この傾向はそのまま引き継がれて『虚栗』に至つてゐる。『虚栗』に示されてゐる漢詩享受の系譜が五山文化の伝統を引くものであることは、かつて言及したところであるが、それを逆に遡及すれば、この延宝末年における芭蕉等の俳諧革新派の作者群に通ずる漢詩享受の伝統が五山以来の系譜を『虚栗』の上にあつて引き継いでゐることが明らかになるであらう。このことは、後の『東日記』と関連してまた述べることにする。

宗因も『莊子』を五山文化の伝統において受け入れたことを先に述べたが、芭蕉もまた五山の『莊子』受容の伝統においてそれを受けとめた。『俳諧次韻』では次のごとき附合を見る。

鶯の足雉脛長く継添て

桃青

這句以_フ莊子_ヲ可_シ見_ツ矣

其角

禅骨の力たは_ニ成_マでに

才丸

芭蕉の思想・作風の展開と『莊子』

この附句によつても『莊子』が禪林においていかに読まれてきたかを見ることが出来る。かく同じ経路を通じて『莊子』を継承したが、芭蕉においては宗因の場合とその資質も異り、歴史的社会的条件も違つてきてゐた。芭蕉は彼自身による『莊子』への傾倒において、新しく『莊子』を再発見した。彼自身のものとしての『莊子』と相会することができた。ここに彼は『莊子』をほぼその本来の価値、性格において自ら受け入れることができた。それがいかに運命的なものであり決定的なものであり、従つてその出会い以後における彼の『莊子』への傾倒ぶりがいかに、烈なものであつたかは『田舎』『常盤屋』の両句合が如実に示してくれる。『田舎の句合』によれば彼は自分の船町の住家を「栩栩齋」となづけてゐたことがわかる。(序および巻末署名) これはもちろん『莊子』の

栩栩然胡蝶也。(栩栩然として胡蝶なり。)

——齊物論——

によつた命名である。嵐雪は『右の句合』の序において、また

仍以是に翁の判を得たり。判詞、莊周が腹中を吞で、希逸が弁も口にふたす。

といつてゐる。すなはち、芭蕉は『莊子』の思想を完全にわがものとし、その造詣の博大、解釈の巧妙精到ぶりにおいては林希逸(宋代、福清の人。『莊子口義』の著者)よりはるかにすぐれてゐるといふのである。当時、林希逸の『莊子』の解釈は極めて高く評価され、その『虞齋口義』は、わが国の近世を通じて最も広く読まれたものである。その「希逸が弁も口にふたす」といふのであるから、芭蕉の「莊子の腹中を吞」んだ深さに対して、いかに絶大な尊敬と信頼とが払はれてゐたかも知ることができよう。もつとも、これは弟子の嵐雪が師をほめあげたことばであるから、ほめすぎが多分にあるとも考へられよう。相当に割引をして聞くべきことばかもしれないが、しかし、芭蕉の性格からして、全くの根もない作り話を序文として掲載することを許した筈もないであらう。『莊子』にも溢美の言は強く戒めてある。(「人間世」) その『莊子』における芭蕉の造詣の深さをわれわれは、この両句合の判詞において

見ることにしよう。

両句合の句・文における「莊子」の引用や寓言的表現に関しては、すでに『大芭蕉全集』第八卷評語篇の語釈において荻野清氏が列挙して示してをられるところであるが、論考を進める都合上、もう一度それをここに列挙し、若干の蛇足も添へ、考察を試みることにしよう。

『田舎の句合』

第六番 右 鳶に乗て春を送るに白雲や

この句に対して、芭蕉は

右の句の鳶にのつて無窮ムキウの空々たるに逍遙せん事、楽、猶窮なかるべし。

と評してゐる。この句ならびに判詞は

夫列子御風而行、冷然善也。旬有五日而後反。彼於致福者、未数数然也。此雖免乎行、猶有所待者也。若夫乘天地之正、而御六氣之弁、以遊無窮者、彼且惡乎待哉。（「夫の列子は風に御して行く。」冷然として善し。旬有五日にして後に反る。彼は福を致す者に於いて未だ数数さくさく然たらざるなり。此れ行くを免ると雖も、猶ほ待つ所の者あり、若し夫れ、天地の正に乘じ、六氣の弁を御して「以て無窮に遊ぶものは、彼れ且つ悪んか待たんや。」）

——逍遙遊——

によるものであるが、なほ「鳶に乗て」は

且夫乗物以遊心、託不得已以養中、至矣。何作為報也。（且夫れ物に乗じて以て心を遊ばしめ、已むを得ざるに託して、以て中を養はゞ至れり。何をか作為して報ぜんや。）

——人間世——

予方将与造物者為人、厭則又乘夫莽眇之鳥、以出六極之外、而遊無何有之鄉、以処壙垠之野。（予は方まさに將に

造物者と与に人たらんとす。厭へば則ち、又夫の莽眇の鳥に乗じて、以て六極の外に出でて、而して無何有の郷に遊び、以て壙垠の野に処らんとす。

—— 応帝王 ——

の「乗物」「乗夫莽眇之鳥」にもよるところがあると思われよう。

第九番 左 壁の麦葎千年をわらふとかや

壁に生ふる麦は朝菌アサキの晦朔を知らず、冥靈メイレイダイセン大椿を論ずるに似たり。

この句、判詞は

小知不及大知、小年不及大年。奚以知其然也。朝菌不知晦朔、蟪蛄不知春秋、此小年也。楚之南、有冥靈者、以五百歳為春、五百歳為秋。上古有大椿者、以八千歳為春、八千歳為秋。而彭祖乃今以久特聞、衆人匹之、不亦悲乎。(小知は大知に及ばず、小年は大年に及ばざれば也。奚を以て其然を知るや。朝菌は晦朔を知らず。蟪蛄は春秋を知らず。此れ小年なり。「楚の南に冥靈なる者あり。五百歳を以て春とし、五百歳を以て秋とす。「上古に大椿なる者あり。八千歳を以て春とし、八千歳を以て秋とす。」而るに彭祖は、乃ち今久しきを以て特ひとり聞ゆ。衆人之に匹ならはんとす、亦悲しからずや。)

—— 逍遙遊 ——

によつてゐる。

第十番 右の句に対する判詞中の

予は龜に乗て遊ばん。

は、第六番の「鳶に乗つて」と同様に「逍遙遊」「人間世」「応帝王」篇中の思想に拠るところがあるものと見られよう。

第十九番 右の句に対する判詞に

されどかれ（註蝸牛）が角の上にあらそはんときは

とあるのは

有国於蝸之左角者、曰触氏。有国於蝸之右角者、曰蛮氏。時相与争地而戰、伏屍數萬、逐北、旬有五日而後反。
（「蝸の左角に国するものあり、触氏といふ。蝸の右角に国するものあり、蛮氏といふ。時に相与に地を争うて而して戰ふ。伏屍數萬、北ぐるを逐ふこと旬有五日にして、而して後反る。」）
——則陽——
の寓言によるものである。

第二十番 判詞に

両句目ざむる心地して遽々然たり。

とあるのは

昔者莊周夢為胡蝶、栩栩然胡蝶也。自喻適志与、不知周也。俄然覺、則遽遽然周也。不知周之夢為胡蝶、胡蝶之夢為周与。周与胡蝶、則必有分矣。此之謂物化。（昔者莊周夢に胡蝶と為る。栩栩然として胡蝶なり。自ら喻んで志に適するか、周たるを知らざるなり。「俄然として覺むれば則ち遽遽然として周なり。」知らず、周の夢に胡蝶と為るか、胡蝶の夢に周と為るか。周と胡蝶とは、則ち必ず分あり。此れを之れ物化といふ。）——齊物論——
の「俄然覺、則遽遽然周也。」に拠つてゐる。また、直接に語句の引用したあとは見られないが、第七番の判詞中の、「兼才寺の入道前の関白」、第十六番の判詞中の「大福山金福寺の和尚」など、ある抽象的な觀念によつて全く仮托の人物を描き出すことは「莊子」の寓言に模した手法であると見られよう。次に「常盤屋之句合」を見てみよう。

『常盤屋之句合』

第三番の判詞に

芭蕉の思想・作風の展開と『莊子』

遙成むかふの岨道を見れば、髭むさく／＼と生たる老人、早わらびの杖にすがり、忽然として来たり、芹をあなどるべからず、ばうふうをすつべからず。我は是、此山にかくれ住野老先生といふもの也と云て即うせぬ。

とあるのは、「人間世」篇に櫟社の大樹が匠石の夢にあらはれて、その意見を述べるところなどに模した全くの寓言的手法による意見の表明である。第十番の判詞中の紫蘇と蓼の問答もまた同様に寓言的な意見陳述である。

第七番 右 独活の千年能なし山の杣木かな に対する判詞は、ほとんど全文「莊子」によつてゐる。

右はまた、能なし山のうどの大木、干とせを経たるも奇也。此山いづれの所にや、山海経にも見えず。もし无無有之郷、広漠の野につゞきたる名所か。彼大樗を捨てざるのためしも思ひ出でられて、うどの大木又愛すべし。

句および判詞で「能なし山のうどの大木」が「千年」を経たのをよしとするのは「逍遙遊」「人間世」において「無用の用」が説かれてゐるのにならつたものである。恵子の大樗（逍遙遊）・櫟社の大樹・商丘の大木（人間世）みな何れも無用の故をもつて大年を全うしてゐるものである。それを「独活の大木」といふ俚諺によつて俳諧化したものにして、そして「能なし山」を寓言的表現と知悉しながら「無何有之郷」（逍遙遊）・「広漠の野」（逍遙遊）に続いてゐる名所かと述べる。かくて、大樗（逍遙遊）を捨てざる莊子を思ひ出して、この「うどの大木」を愛すべしといつてゐるのである。

第十八番 左 だい／＼を蜜柑と金柑の笑て曰

この左の句を勝とする判詞は

橙を蜜柑金かんの論は、作のうちに作有て、虚の中に実をふくめり。数句の中の透逸、此句に於て莊周が心あらむ。尤玩味すべし。

とある。句の「笑て曰」は「逍遙遊」の「蝸与学鳩笑之曰」（蝸と学鳩と之を笑うて曰く）「斥鴳笑之曰」（斥鴳之

を笑うて曰く」によつてゐる。句全体としては、蜩と学鳩、および斥鴳が大鵬の志を知らずしてこれを嘲笑した話（逍遙遊）と大樗等の無用の用を説いた寓言（逍遙遊・人間世）とを折衷して仕立ててある。

以上、両句合を通じてみると、発句においては、其角、杉風とも『莊子』の寓言を俳諧化することにとどまつてゐる。しかもその俳諧化といふのも、なほ談林的な手法の残滓を多分に有してゐる。けれども、その俳諧化は談林調作品のやうに単なる滑稽をたのしむ態度ではなく、『莊子』が寓言によつて説くところの意をそのまま受けいれようとするといふ根本的な立場において従来から一変してゐる。次に芭蕉の判詞においては、詩美とともに、そこに「莊周の心」があるか否かをもつて評価の基準となしてゐる。しかも『莊子』によるところがある句があらはれた場合、内容・表現の文学的価値価値を以つて論ぜず、もつぱらそれが持つところの思想内容によつて評価し、『莊子』に拠つた句もしくは『莊子』的なものにかかはりを附けられる句はすべて「勝」と定めてゐる。また、判詞の修辭・文体においては、発句と同じく寓言的手法を多く用ひ、ここにも談林的な余臭を多分に残してゐる。しかし、ここにおいても、談林調作品のやうに、単なる滑稽・遊戯のためでなく、真実の探求・表現のための寓言へと歩を進めてきてゐる。表現方法論においてはなほ「寓言」説を脱しきれないが、それは俗見を否定し、絶対的なもの表現するためのものとして自覺的に用ひられるに至つてゐることを示すのである。さうしてそこに宗因的な相対的価値観から絶対的価値観へと今や芭蕉とその門下とが轉換しつつあるのを見ることができるのである。

ここには、彼等の価値観轉換のための形而上的基盤として『莊子』がその存在をことさらにあらはにして來てゐることが見られる。しかも、談林時代におけるゆがめられた解釈を全く打破り去つて。ところで芭蕉はここで全く『莊子』に圧倒されてしまつてゐるやうに見える。そのなまのままの『莊子』の撰取、さうした『莊子』による現実の解釈、これは全く『莊子』に彼がとらはれてしまつたことを示すものであらう。だから、彼自身莊子気どりで「栩栩齋

主」などと称してゐるのである。そして、文学は、かれがこの時五山の伝統を通じて継承した李・杜・東坡以下の作のやうに、老荘的な思想の支へを絶対に持つべきものと思ひこむやうになつていくのである。かくして、談林的作風の超克はまづこの両句合において実現の緒が開かれ、これが『東日記』『次韻』における新風展開の基礎となり『虚栗』において高い成果を収め、談林調を一変するのである。初は単に俳言としてとりあげられたにすぎない漢語が、漢詩文調形成への媒介をなし、それが自由にして清新な、力強い格調と、廣大新奇な新詩美の探究へと当時の作者たちの目をひらかせた。談林の日常的な限界を超え、より高い、より力強い、より奥深い詩美の世界へ探り入ることは、彼等にとつて抑へがたい魅力に感ぜられた。しかし、この世界を確実に自己のものにするには、詩人は作詩しなければならぬ。またその作品をうみ出すにふさはしい生活に生きなければならぬ。李・杜・淵明の詩境を自己においても獲得するには、おのれも李・杜・淵明の生活を生きなければならぬ。彼等の超脱の詩境を逐ふためには、俗塵にまみれた市中生活を棄てなければならぬ。この生活面における自己革新への内的なうながしを理論づけ、決意を迫るものは『莊子』の思想であつた。超俗、無為、不拘束の絶対的自由は煩はしい市中につながれた身には望まらるべくもない。かくして、文学上と思想上との両面よりるすうながしのために、芭蕉はつひに船町の「栩栩齋」を棄て、市井人としての生活を超脱し、家族係累を離れ、延宝八年の冬深川の草庵に入つていつたのである。思想と創作と生活の一致、実践による自己の思想の形成をはかり、そこから作風の展開を求めて彼は深川の草庵の生活を選びとつたのである。しかし、これだけの決意、これほどの実践を通して新しい作風はさう易々と作り出されるものではなかつた。連句創作の上では、延宝七年以来、依然として空白の時期が続き、発句も極めて少ししか出来てこない。まさしく彼にとつて生涯のうちにも何度もない苦悩の時期であつた。もつとも、この新風展開のための摸索に苦しみ、句作のできなかつたのは他の作者たちにも共通の苦悩であつた。言水・才丸・来山・素堂等、何れもこの時期における作

品は極めて少い。しかし、さうした中でも、芭蕉における苦悩が最も深酷であつたらうことは、この期のこれら作者たちの作品を比較することによつて見ることが出来る。

かうした苦悩のあとをまとめて示す撰集として、延宝九年の六月に言水撰の『東日記』が出た。ここには、あとで作品等によつて示すやうに、新風展開をめざして刻苦する作者たちが、それぞれ自己の問題を解くために『莊子』ととり組んでゐるのが見られる。その序文に才膺はいつてゐる。

有^リ言^ル邪^ヤ、其^レ無^シ言^ハ邪^ヤ。其^レ以^テ為^ス異^ニ、有^シ弁^ハ乎^ヤ。其^レ無^シ弁^ハ乎^ヤ。ふるきあたらしきをいふ時は、真人を待て天倪にまかすべき事しかり。

これは「齊物論」・「大宗師」により、『東日記』に作品をのせる作者たちの句風の改革新展開に関して所見をのべてゐるのである。

『東日記』所収の芭蕉の作品で『莊子』とかかはりを持つものとしては、次の二句があげられよう。

五月雨に鶴の足みじかくなれり

愚に暗く棘をつかむ螢かな

「五月雨」の句は、いふまでもなく「駢拇篇」の

是故鳧脛雖短、統之則憂。鶴脛雖長、断之則悲。（是の故に鳧脛短しと雖も、之を統^ツがば則ち憂ひなん。鶴脛長しと雖も、之を断^ツたば則ち悲しみなん。）

に拠つてゐるのである。「五月雨に」の句は『莊子』の寓言を知的興味本位に俳諧化したにとどまり、むしろ談林的な余臭を強烈に感じさせる作品である。これは『東日記』刊行の延宝九年作ではなくて、おそらくその前年の八年あたりの作と見るべきではなからうか。同書所収の芭蕉の他の作品と比べてみても、蕉風化の著しい遅れがめだつて見

える。「愚に暗く」の句は、この寓言的表現が『莊子』的なるものの投影を感じさせるが、しかしこの把握を通してものごとの真実に迫らうとする態度が滲透してゐて芭蕉の『莊子』同化の過程がうかがはれて興味深い。

なほ『東日記』には

読莊子 彼_レ是_ハ嵐雪の偽花のうそ

其角

蝶飛で獲_バざれかゝる気色哉

言水

などの句が見られる。其角の句は、彼がまだ『莊子』を、思ふほどの「うそ」を書いてまはる書と見てゐることを示し、なほ談林的な寓言觀から離脱しきれないでゐる状態を告げてゐる。撰者言水の句は、やはり寓言的な見立てをたのしむものであるはあるが、蝶の姿態の美をとらへようとしてゐる真面目さにおいて、談林的なるものから遠ざからうとしつつあつた彼のすがたがみとめられよう。かうして、さきにも言及したところであるが『東日記』においては延宝末年に談林を超克しようとする苦惱し、新風摸索に全情熱を投入した作者たちが、共通して『莊子』をその新風展開運動のよりどころとしたこと、またその『莊子』は、唐宋の詩人の作品と表裏一体をなすものとして五山の伝統から受け継がれたものであつたといふことが見られると思ふ。

『東日記』の作品が具体的に示すところによつて見てみると、この頃の芭蕉の『莊子』受けとり方は、まだなほ觀念的、抽象的であり、理論の面に見られるほどには実作の上では進んでゐないことが明らかである。これは、其角・才丸・言水においても同様である。其角はことに『莊子』をふりまはしたがつてゐるのであるが、最も觀念的、抽象的である。

延宝九年七月に、前月刊行の『東日記』に引続いて『俳諧次韻』が刊行された。芭蕉と門人其角・揚水、それに才丸を加へた四吟二百五十韻は、京の信徳の『七百五十韻』に觸発され、これをついで十百韻に満たさうとしたもので

あつたが、結果において『七百五十韻』をはるかにしのぐ新風を展開し得た。この『次韻』こそは『莊子』の影響を最も強く受けたものと見られて来たものである。

まづ、その第一作品たる「鷺の足五十韻」は

鷺の足雉脛長く継添て

這句以ニ莊子「可」見矣

桃青

其角

に始まつてゐる。鷺の足の句は、さきにも引いた

是故鳥脛雖短、続之則憂。鶴脛雖長、断之則悲。（是の故に鳥脛短しと雖も、之を続がば則ち憂ひなん。鶴脛長

しと雖も、之を断たば則ち悲しみなん。）

—— 駢拇 ——

に拠つて『七百五十韻』に『次韻』二百五十句を継ぐことを述べてゐるのである。其角の附句は、ことはるまでもないことをわざわざことさらに述べてゐる感があるが、これは『東日記』の「嵐雪の偽」の発句に、わざわざ「読莊子」と前書を附けずには居られなかつた彼の青年らしいペダントリイのなせるところであらう。それはともかくとして、この二句からする第一印象によつて、『次韻』はいかにも『莊子』的な句ひのする作品のやうな感じを持たされることになるのである。

次に「稻負鳥百韻」の

子丑の番を寅に預けて

其角

渾沌 翠に乗て氣に遊ぶ

桃青

は「渾沌」「翠に乗て」「氣に遊ぶ」がすべて『莊子』に拠つてゐる。「渾沌」は

南海之帝為儵、北海之帝為忽、中央之帝為渾沌、儵与忽、時相遇於渾沌之地。渾沌待之甚善。儵与忽謀報渾沌之

芭蕉の思想・作風の展開と『莊子』

徳。曰、人皆有七竅、以視聽食息。此独无有、嘗試鑿之。日鑿一竅、七日而渾沌死。（南海の帝を儵と為し、北海の帝を忽と為し、中央の帝を渾沌と為す。儵と忽と、時に相与に渾沌の地に遇へり。渾沌之を待つこと、甚だ善し。儵と忽と渾沌の徳に報いんことを謀る。曰く、人皆七竅あり。以て視聽食息す。此れ独り有ること無し。嘗試みに之を鑿たんと。日に一竅を鑿つ。七日にして渾沌死す。）

—— 応帝王 ——

「翠に乗て」は

天之蒼蒼、其正色邪。其遠而無所至極邪。其視下也亦若是則已矣。……風之積也不厚、則其負大翼也無力、故九萬里、則風在下矣。而後乃今培風、背負青天、而莫之天闕者。（天の蒼蒼たるは其れ正色か、其れ遠くして至極する所なければか。其の下を視るや亦是の若くならんのみ。……風の積むや厚からざれば、則ち其の大翼を負ふに力なし。故に九萬里にして則ち風斯に下に在り。而る後に乃ち今風に培はれ、背に青天を負うて、天闕する者なし。）

—— 逍遙遊 ——

および『田舎の句合』第六番「鳶に乗て」の句ならびに判詞について引いた「夫列子御風行」（逍遙遊）、「乗物以遊心」（人間世）、「乗夫莽眇之鳥」（応帝王）などに拠るところがあるものと思はれる。

また「氣に遊ぶ」は

彼方且与造物者為人、而遊乎天地之一氣。（彼れ方に且に造物者と人たり。而して天地の一氣に遊ばんとす。）

—— 大宗師 ——

に拠つてゐる。このやうに、この附句は部分的にすべて『莊子』に拠つてゐるばかりでなく、また全体として寓言的に仕立てられてゐる。

最後に卷末の余興四句

附贅イボ一つつ奚イボに置けり日露

無用の枝を立し犬蘭

夜ヤ兒ニの朝咲花アサにあらそひて

塵裡アムリの四虫音を隠る也

揚水

桃青

其角

才丸

のうち、揚水、桃青の二句は徹底して『莊子』「駢拇篇」の

駢拇枝指、出乎性乎。而侈於徳。附贅臙疣、出乎形哉、而侈於性。……是故駢於足者、連无用之肉也。枝於手者、樹无用之指也。(駢拇枝指、性に出でたるかな。而かも徳に侈れり。附贅臙疣、形に出たるかな。而かも性に侈れり。……是の故に足に駢ある者は無用の肉を連ぬるなり。手に枝ある者は無用の指を樹つるなり。)

に拠つてゐることが見られる。第三の其角の句は、やはり右の「駢拇篇」にのべてゐるところの意味の俳諧化であるし、第四の才丸の句に就いても同様のことがいへよう。なほ「四虫」は『莊子』に「往見四子藐姑射之山、汾水之陽」(逍遙遊)の四子とか、子祀・子輿・子犁・子来(大宗師)とか王貽・申徒嘉・叔山無趾・哀貽它(徳充符)とか、あるひは竜逢・比干・萇弘・子胥(胥篋)とかよく四人といふ数を挙げてゐるのに拠り、四吟の作者を俳諧化したのであらう。これに「塵裡」ととくに限定を与へたのは

聖人不従事於務。……而遊乎塵垢之外。(聖人は務に従事せず……而して塵垢の外に遊ぶ。)|— 齊物論 —|
仮於異物、託於同体、忘其肝胆、遺其耳目、反覆終始、不知端倪、芒然彷徨乎塵垢之外、逍遙乎無為業。(異物に仮り、同体に託し、其肝胆を忘れ、其耳目を遺れ、終始を反覆して、端倪を知らず。芒然として塵垢の外に彷徨し、無為の業に逍遙す。)|— 大宗師 —|

の逆説的俳諧化であり、また『七百五十韻』に対する謙遜の辞でもあつたのである。(第三・第四に就いて『莊子』

の俳諧化であるとする問題は問題もあらうが、少くともその内容においては、四句とも、ことごとく同一意味をのべて、式目の制約を無視してゐるのである。）

また「秋の野中百韻」の

昼夢の食たく程に夕ぐるゝ

其角

人死を待て生たはいなし

桃青

の附合も「黄梁一炊の夢」の故事をふまへたものであらうが、その根底には荘子の死生觀（齊物論）とのかかはりがやはりうかがはれよう。

以上で『次韻』における芭蕉の句で『莊子』によるところのあるものについて見、それと関連して余興四句の他の三作者に句についても言及したが、この外『次韻』における他の作者の句で『莊子』に関係あるものを見てみよう。

「鷺の足五十韻」の

師魚フリイサは諫め鰻は胸サカレを割ける

才丸

は、単に歴史的な知識から来てゐるばかりでなく

昔者龍逢斬、比干剖、萇弘脛、子胥靡。（昔者、龍逢は斬られ、比干は剖かれ、萇弘は脛られ、子胥は靡せらる）

—— 脛 篋 ——

にも抛るところがあつたであらう。また「秋の野中百韻」の

露鷄トリの羽がいの鷺ヒヨコひよひよと

揚水

には、さきに才丸によつて『東日記』の序に引かれた

其未嘗有言邪、其以異於鷺音、亦有弁乎、其無弁乎。（其れ未だ嘗て言ふこと有らざるや。其れ以て鷺音に異な

りとせんに、亦た弁ありや、其れ弁なきや。）

—— 齊物論 ——

の「巖音」が連想せられるであらう。

以上『次韻』の附句について見てきたことを考察してみるに、芭蕉の作も門人のそれも『莊子』に拠つた句はすべてなほ寓意的表現の生硬さをあらはに呈してゐて、いまだ十分な詩的純化の域に達してゐないことが知られる。これは附句の性質上、思想的内容を一句のうちには詩的昇華せしめることに困難な条件があることにもよるのであらうが、すでに早く『田舎の句合』・『常盤屋之句合』で示された思想が、連句作品においては、いまだに寓言的な世界から脱し得ないままである事実をつきつけられるのである。これはどう考へたらいいであらうか。新作風の展開が、言ふべく易くして、行ふにいかにも困難を極めるものであるか、またそのために芭蕉等がいかにも苦しい摸索にあがいてゐるかを、まざまざと示してゐるといふことであらう。そして、その困難によつて傷だらけになつてゐる作品のすがたを眼前に見るのである。しかし「人死を待て」の附合のやうに『莊子』的な見方、考へ方、感じ方とそれに基く境涯が詩的境地として描き出されるやうになつてきてゐることも見られ、ここに次の『虚栗』への深まりを暗示してゐることが感じとられるのである。貞門の俗物性を打破するために宗因によつて採上げられた『莊子』は、さらに徹底的に俗物化した談林俳諧（漢語調作品も含めての）の俗物性と抗争し、これを超克するためにここに芭蕉等によつて再び、そしてその本来的、根源的意味において撰取された。庶民の文学が庶民自体の俗物性とたたかつて、苦しい成長をとげる過程をこの延宝末年の俳諧の展開のうちに見るのである。

天和時代

『次韻』においては、その余興の四句に見られるやうに、芭蕉等は『七百五十韻』に対しては極めて謙虚にへりくだ

芭蕉の思想・作風の展開と『莊子』

つた態度をとつてゐるが、事実においては『七百五十韻』をはるかにしのぐ新風を展開し出したのであつた。そしてここに芭蕉の創造力は摸索苦悩の停滞状態を脱出し得て、限りなく新しい作品を産み出す活動期に導き入れられたのであつた。かくして『武蔵曲』・『虚栗』等に収められる作品が、深川の草庵を創作の場としてつきつきと作られていつた。新しい芭蕉庵での生き方が創作の力としていきいきとはたらき出したのだ。かうしたあり方において、延宝九年（天和元年）から天和二年、三年にわたつて作られた句は多く『虚栗』に収められてゐる。『虚栗』に示された作風は、なほ蕉風への過渡期的な色彩を多分に持つてゐるにもせよ、それは延宝末年以来の新風運動に対して一時期を畫するものであつた。そしてここに新風のおもむくべき方向を導く道標が定まり示された。かうした『虚栗』所収の作品の中でも、芭蕉の作品はことにむら、が少く、新しさを確実に体现して来てゐることが見られるのであるが、今そのうちで『莊子』に關係ある句を抜き出して見てゆくことにする。

茅舎買^ン水^ヲ

氷^ニ苦く偃鼠^ヲが咽^ヲをうるほせり

この句は、いふまでもなく

鷓鴣巢於深林、不過一枝。偃鼠飲河、不過滿腹。（鷓鴣深林に巢ふも一枝に過ぎず。偃鼠河に飲むも滿腹に過ぎず。）

——逍遙遊——

に拠つてゐる。なほ「氷^ニ苦く」の上五は

今吾朝受命而夕飲冰、我其内熱与。（今、吾、朝に命を受けて夕に氷を飲む。我、其れ内、熱せるか。）

——人間世——

あたりに識闕下でつながるところがあるかもしれない。

うぐひすを魂にねむるか嬌柳

ば、^(一三)「莊周夢為胡蝶」(齊物論)がこの表現の奥にかくされてゐる。

花にうき世我酒白く食黒し

は、前書とした白樂天の詩句に対し、寒山詩的詩境の陰暈を以て応じてゐることが感じとられることはかつて述べたところであるが、その根底に流れるものとしては

吾食也執粗而不感、爨无欲清之人。(吾が食や、粗にして感からざるを執り、爨に清を欲するの人無し。)

——人間世——

の生き方があるものと見られよう。『虚栗』において『莊子』とかかはりを持つ芭蕉自身の作品は右の三句であるがすべてこれらは彼自身の『莊子』を自己のものとなし得た生き方から出たものであることを読みとることができ。さういふ状態であつたから、彼の芭蕉庵における生き方を他から見た時には

芭蕉あるじの蝶丁見よ

其角

——詩あきんど歌仙——

と描かずにはゐられなかつたのである。ここに「夢為胡蝶」といふ境涯を生き、貧居に春日胡蝶とたはむれてゐる彼のすがたが目に見えてくるであらう。

門人たちの句としては

鴿日不^{ツルヘニシテユアミセ} 浴白、鳥日不^{ハニシテクロメシ} 黔黒

川鳥白うを浴せずして白し

楓興

不二に目鼻混沌の王死^{コトトシ}シチより

鼓角

人何ヲカ土肉^{ナマコ}の無為ナル貌^{カタチ}

揚水

芭蕉の思想・作風の展開と『莊子』

などが見られる。楓興は「天運篇」により、鼓角は「応帝王」により作句してゐる。これら門人たちの句は、なほまだ全く寓言的で、其角・杉風がかの両句合で到達したところから一步も出でてゐない。しかし、それにしても、これは芭蕉はじめ、指導的な立場に立つ有力作者が『莊子』に深く傾倒してゐるところに影響され、門人たちも彼等なりに『莊子』摂取の問題と取組んだ跡を示すものであらう。

芭蕉においては『莊子』は、ここに至つては、もはや觀念としてではなく、生きた思想として草庵における日々の生き方によりて受けとめられた。

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり

には『莊子』の思想が芭蕉の内的生命と融合同化し、彼の境涯にあらはれ、その色あひが作品内面に滲透してゐることを見る。この発句は作品自体として価値を有する——寓意を持つ故にではなく——表現にまで高まつてきてゐる。いまや、寓意をはなれ、作品自体が『莊子』から独立して詩的価値を荷ひ、しかも『莊子』によつて、その詩精神の高邁を支へられるに至つたことを見るのである。『莊子』を得ることによつて『莊子』の拘束を脱し得た詩精神は、物事の美をその生命性においてとらへる。

うぐひすを魂にねむるか嬌柳

は、たとひ知巧による操作が著しいにもせよ、かの

五月雨に鶴の足短くなれり

とはいかにはるかに隔つてゐるか、いかに本質的に異なる次元に到達してゐるか明らかであらう。『虚栗』に至つて初めて芭蕉は思想と作風を高次に一致せしめ得た。これは彼が『莊子』とどこまでも真摯にとり組み続けたからでもあらうが、また『莊子』をその詩境、表現の中に摂取同化し得てゐる『寒山詩』や李白、東坡をはじめとする唐宋詩人の詩に没

入したことも与つて力があつたであらう。かうしたものを全体として芭蕉に与へたものは、さきにも屢々述べたやうに五山文学の伝統であつたが、それは、外国文学への従属から超脱して、日本民族の個有の文学伝統との止揚綜合がなされるべく、そこまで相伝承されて来たものであつた。この任務に耐へ得る、日本人としての性格をあくまでも持する、しかも柔軟な弾力ある精神の持主として芭蕉は、ここに彼自身をあらはにして来た。決してそれは孤絶独往の道でなく、同時代の同じ道すちを歩む人々とともに切り拓いてきたところであるが、次第にその能力による達成の差が明らかになり出してきてゐた。それは、この論考において見來つたやうに決して容易ではない苦難に満ちた混冥はてしなき道程であつた。しかし芭蕉はつひにここに到達した。ここに芭蕉の作風・思想の性格は決定された。その内面深く『莊子』は、活きた基盤として根を張つてゆき、絶えず日常性の殻を破り、俗物性を超克し、常に生成してやまぬ思想・作風展開の根源的動因として、詩人芭蕉において造物者的存在となつてゆくのである。^(一五) 頼原博士は「天和頃までの芭蕉の俳諧と莊子とは、むしろ単なる素材的の交渉として認められるにすぎなかつた。」とされ、「芭蕉に於ける莊子的な物の考へ方がその「新しい風雅觀の構成にあづかるやうになつて來た」のは、貞享末年のことであると述べて居られる。しかし、これは、極めて概括的に説かれたことでもあり、また、芭蕉と莊子との關係を『笈の小文』における風雅觀に重点を置いて見ようとされたため、延宝末から天和にかけての芭蕉と『莊子』との内面的なかかはりあひを少し軽く見すぎる結果におちいられたものであらう。談林調の超克、天和調の展開が、単に素材や語彙の面ではかりではなく、新しい、より高い詩精神の樹立なくしてなされなかつたことは、ここに見て來たところであり、その新しく、より高い詩精神の樹立こそ『莊子』に負ふものであつたのである。

註(一) 頼原退蔵博士、『芭蕉講座』第二卷、総説。

(二) 『莊子』は原文のままの引用では読みにくいこともあらうと思はれるので引用文の下に括弧して『国訳漢文大成』の国訳書

芭蕉の思想・作風の展開と『莊子』。

き下し文を添へることにした。『莊子』の解説訓読に関しては私に考へるところがなくはないが、芭蕉との関連においてと
りあつかはれる『莊子』は、できるかぎり芭蕉当時の解説訓読によるべきであらうと思はれる。そこで中、近世を通じて広
く読まれた林希逸の『莊子口義』によるところが多いとみられる『国訳漢文大成』の解説訓読を一応ここに添へることにし
たのである。なほ『莊子の』テキストは中華書局の『莊子集解』（王先謙註）によつた。

(三) 『俳家大系図』

(四) 『虚栗に』おける『寒山詩』（「国語」第四卷第二卷）

(五) 以下、両句合について引用する『莊子』の国訳書下し文に「」を施した部分は、荻野氏が両句合の語釈に採上げられた箇
所である。

(六) 「第六番の『鳶に乗て』と同じく、列子の事などを下心にかういつたので……」（荻野氏）

(七) これも荻野氏が指摘して居られるところである。

(八) 右に同じ。

(九) 右に同じ。

(一〇) このところも右に同じ。

(一一) 右に同じ。

(一二) 小林一仁氏論文「芭蕉の句合判詞について。」

(一三) 加藤楸邨氏、『芭蕉講座』第一卷。

(一四) 『虚栗』における『寒山詩』（「国語」第四卷第二号）

(一五) 顯原博士、『芭蕉講座』第二卷、総説。

附記

本稿を印刷にまはしてから野々村勝英氏の「談林俳諧の寓言論をめぐつて」（「国語と国文学」昭和三十一年十一月号）を
見ることができた。談林の寓言について、私の説いて十分ならざるところを明快に論述して居られ、教示を受ける点もすく
なくない。また若干の私見もなくはないが、これから稿を改めるわけにもゆかないので、とりあへず以上のことを附記して
おく次第である。